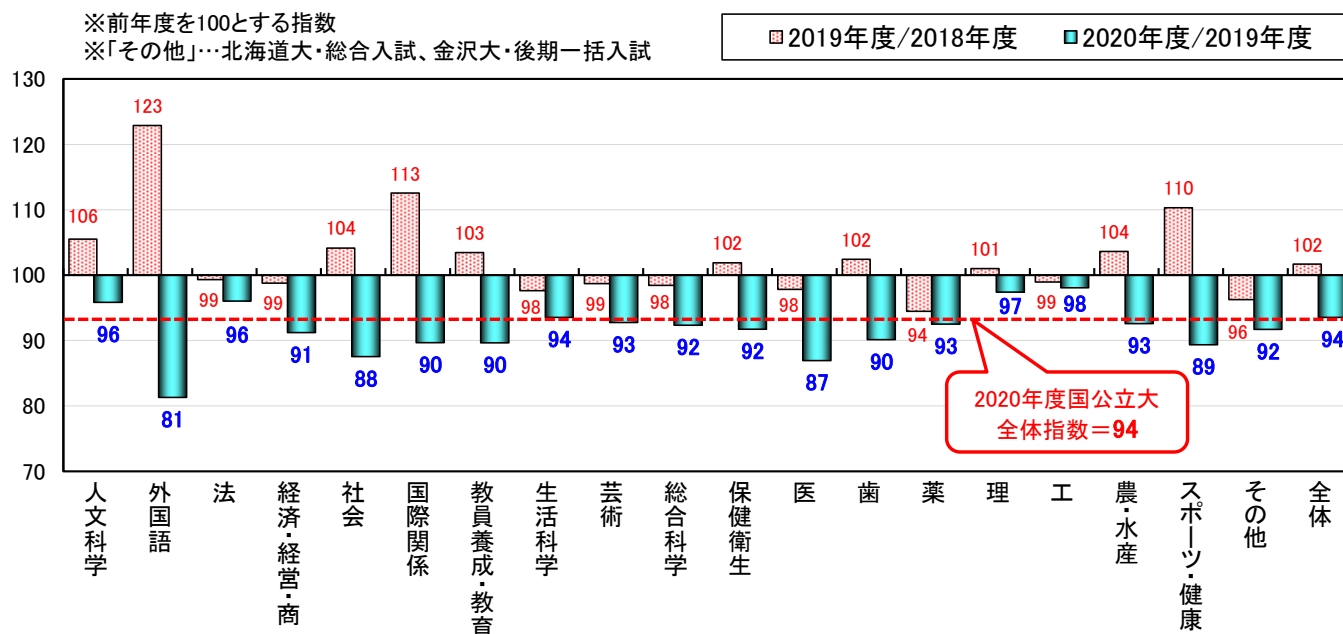


2020 年度入試状況分析【国公立大】

※本文内の（ ）内の数値は志願者数の前年度確定数との対比指数を表します。

◎系統別志願状況

□工学系は微減に留まるものの、全ての系統で減少



工(98)は微減に留まりましたが、他の系統はいずれもはっきりと減少しました。なお、2019年4月から公立大へ移管した公立千歳科学技術大を除くと工は(97)のやや減少となります。また、ここ数年みられてきた「文高理低」の傾向はすっかり姿を消しました。

文系では、外国語(81)は前年度4年ぶりに増加が大幅増加だった反動で減少しました。また、経済・経営・商(91)はオリンピック・パラリンピック後に予想される経済指標の後退、昨今の厳しい国際情勢等への不安を反映した系統への人気低下の影響で、2年連続減少となりました。文系では、しっかりとした固定層に支えられている人文科学(96)、このところの低い人気で下げ止まり感のある法(96)の減少率が小さくなりました。社会(88)、国際関係(90)は前年度増加の反動がみられました。なお、国際関係は募集人員が少なく、高倍率になりやすいことも敬遠される要因となりました。

理系では、農・水産(93)は模試動向でみられた系統への不人気と前年度の反動でやや減少しましたが、理(97)、工(98)は国公立大全体の減少率より小さく、理・工系の人気上昇で志願者数を維持しました。

メディカル系では、医(87)が6年連続減少となりました。これは、入学定員の増加で間口が広がり、現役合格率がアップしたことで既卒志望者が減少していることから、全体の医の志望者が減少していること、さらに理系成績上位の受験生の志望が理・工系に移ったことが要因です。また、医の易化により志望変更による流入が減少している歯(90)も減少しました。薬(93)は、薬剤師過剰への不安から2年連続減少しました。保健衛生(92)は比較的センター試験の目標ラインが低い地方公立大での設置が多く、センター試験の平均点ダウンの影響により国公立大への出願自体を断念した層がいた影響がみられました。

文理いずれから志願者がいる系統では、オリンピック・パラリンピック効果が薄れたスポーツ・健康(89)、教育を取り巻く厳しい環境から敬遠された教員養成・教育(90)は、いずれも前年度の反動も加わって減少となりました。